



子どもの6分の1 — 6人に1人が貧困状態に陥っているといわれる現在の日本。この連載では、その6分の1の子どもたちの現状と、この地域で「子ども貧困」の解決に取り組む団体の活動をご紹介します。

「貧困の連鎖」から「希望の連鎖」へ。 子どもたちを受け止める場所づくりに取り組む

私が学習支援を行うわけ

まず、皆さんに伝えておきたいことがあります。それは、「どんな家庭に生まれても、そこに幸せを感じ、その子らしい生き方を選択して歩んでほしい」と私は考えています。しかし、今回のテーマにもあるように、今や6人に1人の子どもが貧困と言われています。当然のことながら、子どもは生まれる家庭を選べません。つまり「サイコロを振って1が出た人は貧困です」と決められてしまうようなものです。もちろん「貧困家庭で生まれ、育つこと」そのものが生きづらさではありませんが、お金が無い中で、さまざまな生きづらさが生まれやすいことは事実です。その多くの形として一人親世帯が挙げられます。

実は、私は兄と母親が違う家庭で育ちました。兄の母は兄を生んですぐに亡くなったと聞いています。もし、父が再婚していなければ、私は生まれず、兄は私の支援する対象になっていたかもしれません。貧困とはそんな偶然性の中で生まれているのだと感じます。

また、今思うと父親と母親、それぞれから向けられる自分の役割の違いからか、自らの家での求められる役割にずれを感じ、居心地の悪さから喧嘩や家出をすることも少なくありませんでした。そんな私でしたが、習い事の先生や地域の駄菓子屋のおじさんにいつも話を聞いてもらい、支えられて今があると感じます。そんな私が福祉と教育を学ぶために入った大学で、この団体と出会いました。



医師が学習支援に往診に来ます
看護師など、仕事の話もします



テラハではアンビシャスのママが
中心にご飯を作ります



食後はテレビを見ながら、団らんのひと時を過ごします

アンビシャス・ネットワークの成り立ち

2011年、当法人の前身団体の初代代表がホームレスの炊き出しに参加した際、「学生が主体となって貧困などで困っている人にできることはないか」と考え、始めたのが学習支援でした。今でこそ法整備も進み補助金も多くありますが、当初は子どもの貧困という言葉も浸透しておらず、少額の補助金を頂きながら、身を削って日々活動を行っていたのを思い出します。継続する中で、市の事業として行っていきたいという話が出て法人格を取得し、現在は卒業生と在校生が協力しながら活動を行っています。現在は学習支援だけでなく、地域に開いた溜まり場事業「テラハ」と訪問型学習支援事業「フレール」の大きく3つの事業を行っています。

学習支援の実情

学習支援は「お金が無くて、塾などに通えない子どもにも勉強を教えている」と思われることが多くあります。確かにその側面はあるものの、そういった子だけではなく、「経験の不足から夢や目標もなく、勉強をやる意味が分からない」「勉強の習慣がなく勉強が嫌い」といったような、勉強にネガティブなイメージを持っている子も少なくありません。そんな子どもたちの気持ちに寄り添い、時には保護者や行政とも連携しながら、『勉強ができるようになる支援』から行います。趣味や日常的な会話から心を解きほぐし、「ここでなら苦手なことも頑張れる」と思えるような現場づくりを心掛けています。

『一般社団法人 アンビシャス・ネットワーク』代表理事 田中 嵩久

また、さまざまな団体と連携し学習だけでなく、食事提供や医師による往診など、学習という切り口から子どもたちと出会い、「学び」「食」「医療」といった子どもたちが普通に暮らしていけるための土台づくりを行っています。

学習支援の限界

全国で展開されている学習支援ですが、通い続ける力が無い子や勉強に向かう土台のできていない子の支援は十分になされてきませんでした。また、対象が限定されてしまう学習支援では、地域の方の「力になりたい」という思いにも応えることができませんでした。

そこで、居場所に特化した溜まり場と呼ばれる第二の家事業「テラハ」と訪問型学習支援事業「フレール」という事業を開始しました。テラハはフリースペースに学生スタッフが常駐し宿題や遊び、食事作りなど、まさに家のような安心できる地域の居場所を目指しています。子ども食堂の企画なども実施し、地域の人や子どもたちの「出会いの場」にもなっています。また、学童の年齢が外れる小学5年生以上を対象にしており、貧困だけでなく地域の居場所の欠如など、制度の狭間に陥りやすい子どもたちを受け止める重要な場になっていると感じます。

このようなさまざまな支援の中で、自分に合ったプログラムを選択して受けることができるようになれば、子どもたちにとっても生きやすい社会になると考えています。

参加者の声

「僕にとって学習支援は時間があれば行きたくなくなるような楽しい場でした。ここに通って、明るくなったように感じます。特に同級生だけでなく、後輩や少し年の離れたお兄さん、お姉さんとの何気ない会話の中で、人と話すのが楽しくなりました。その経験は高校に行っても、部活の先輩とのコミュニケーションなどで生きていると感じます。塾のように勉強だけでは

なく、人と人の関わり方なども教えてもらったと今は感じます」。他にも、「勉強に対する気持ちが変わった」「辛いことがあっても気軽に相談できる場所があって、一人じゃないと感じ頑張ろうと思える場です」と、卒業生にとっても心の居場所になっているようです。

最後に…

子どもの貧困は「今生きづらい」だけでなく、「これからの生きづらさ」でもあります。そのため、継続的なアフターフォローも求められます。そんな終わりの見えない支援の中で、かつて学習支援に通っていた子が現在、大学生となりスタッフとして子どもたちを支えています。そんな「貧困の連鎖」から「希望の連鎖」へと社会を変えていく一歩を確かに踏みしめながら、活動ができることを幸せに感じます。

しかし、どの事業においても継続が困難な現状があります。誰かがやらなければいけないことでもあります。この4月より初期から活動する私を含めた二人が職員として、本気でこの社会問題に取り組んでいきます。お知恵やご寄付を含め皆様からのお力を借りながら、子どもたちが生まれてきてよかったと思えるような社会にできたらと思います。子どもは未来の100%だから。



お互いの良さを発見し表彰しました

INFORMATION

一般社団法人 アンビシャス・ネットワーク
E-mail: ambitious.network118@gmail.com
URL: <https://ambitious-network.jimdo.com/>